

児童の書く力を育成する学習指導 －思考と表現の一体化を図る書く活動の設定－

所属校：中央区立泰明小学校
氏名：細山 貴信
派遣先：玉川大学教職大学院

キーワード：言語活動の充実・思考力・判断力・表現力の育成・思考と表現の一体化・書く力の育成

I 研究の目的

1 研究の背景

2008年（平成20年）3月に告示された小学校学習指導要領（以下、新学習指導要領）により、各教科の学習において、言語活動の充実が求められている。これを受けて、本研究は、児童の思考力・判断力・表現力等の育成のために、国語科のみならず全教科の学習において、言語活動の充実をどのようにして図るかを追究することとした。各教科の学習における言語活動の中でも、特に論理的思考力の育成に重点を置き、児童の文字言語による表現（書く力）の育成が必要不可欠であるという考えを基調とした。なぜならば、直接観察することが難しい思考を指導者がとらえることができるのは、問題解決場面における、児童が表現した文字言語であり、この児童の書く力の育成こそが思考力の育成に直接結びつくものだと考えたからである。

この書く力の育成については、国語科を中心にこれまで取り組まれてきたものであるが、今後は、特に国語科以外の教科の学習においても取り組むことが求められる。各教科の学習（国語、社会、算数、理科）における書く活動の充実に焦点をあてて研究を進め、具体的にどのような指導を行えばよいのかを検討し、明らかにすることを本研究のねらいとする。

2 研究の目的

各教科における書く活動の指導実態をとらえるとともに、児童の思考力・判断力・表現力の育成を図るためには、各教科の学習において、どのような書く活動の設定と指導を行えばよいかを検討し、児童の書く力を育てるための学習指導方法について追究する。

II 研究の方法

各教科の学習における言語活動を充実させるために、特に書く活動に焦点をあて、児童の思考過程における書く力の役割や書く活動における思考を分析する。

(1) 言語活動の充実を図る背景の整理

①中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（2008年1月）

②言語力の育成方策について（「言語力育成協力者会議」資料2007年）

③小学校学習指導要領解説総則編（2008年）

(2) 理論研究・先行事例研究

① 理論研究

思考過程における書く力の役割、書く活動にはたらく思考に関する文献を研究する。

② 先行事例研究

各教科の学習において、言語活動の充実を図る研究や思考力の育成を図る研究を行っている先進校の事例を分析、考察する。

(3) 授業分析・考察

各教科の学習において、どのような書く活動が設定され指導が行われているか実態を把握する。

都内の異なる区・市の公立小学校6校の授業分析を行う。計37時間（研究授業5時間を含む）

・分析対象学年 3年生から6年生

・分析対象教科 国語・算数・理科・社会科

(4) 思考と表現の一体化を図る学習指導の検討

理論研究、先行事例研究、授業分析を基に、思考と表現の一体化を図る書く活動の設定を探る。

① 書く基礎技能の育成を図る

② 指導過程に即した書く活動の設定

③ 思考したことを書くための指導の手だて

III 研究の結果

1 言語活動の充実を図るための視点

言語活動の充実を実現するための視点を明確にした。中央教育審議会答申、さまざまな報告書、自己の実践の振り返りから、国語科、国語科以外の教科の学習指導、それぞれ次のような視点が必要である。

(1) 国語科の学習指導における視点

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」それぞれの領域における言語活動での学びや身に付けたはずの言語能力を他教科の学習活動において活用する。

(2) 国語科以外の教科の学習指導における視点

教科の特性や内容・発達段階に合わせ、言語活動を充実させ、言語能力（話す・聞く・書く・読む）を育

成するという視点での指導を行う。

2 思考過程における書く力の役割

言葉による思考をある問題から解決までの一連の言語活動ととらえたとき、思考は以下の3つの過程を経て行われるととらえることができる。(図1参照)

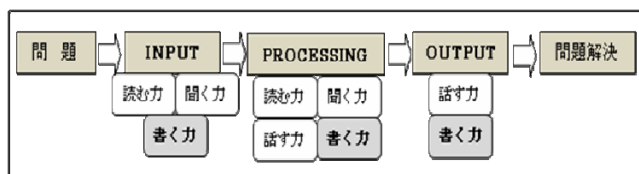


図1 「思考過程と主にはたらく言語能力」

本来、思考は頭の中で行われている言語操作活動であるため、直接観察することはできない。児童の思考力を育成するためには、目に見えない言語による情報処理(言語操作活動)をいかに文字言語による認識を行い、指導するかが重要である。そのため、各教科の学習における、INPUT・PROCESSING・OUTPUTそれぞれの過程において、書く活動を設定し、書く力を育成することは、児童の思考力を高めるための有効な手段である。思考過程における書く力の役割は以下の通りである。

INPUT (収集した情報の記録・保持する役割)

PROCESSING (情報処理・思考を記録する役割)

OUTPUT (情報処理、思考した結果を表す役割)

3 書く活動にはたらく思考(文献・先行研究から)

書く活動において、言葉による思考(言語による情報処理)をどのように行っているかを具体的にすることは、指導上、重要な視点となる。各教科等の学習において、どのような言語情報を用意し、児童にどのように情報処理させるかを指導者が明確にすることができるからである。そこで、国語科の作文指導の視点から、文章表現においてはたらく思考(言語による情報処理)について述べられているものを文献や先行研究から分析し、検討した。その結果、書く活動にはたらく主な思考を析出した。(「思考スキル」表1参照)

1	比較する	—	収集した情報から違いをみつける
2	分類する	—	収集した情報の共通点や相違点を見つけてみる
3	分析する	—	収集した情報の特徴をみつける
4	選択する	—	収集した情報を目的にそってしぼりこむ
5	推論する	—	問題解決の見通しをもつ(予想する)
6	構想する	—	処理してきた情報を組み立てる・関係づける
7	評価する	—	本当にそうか見直す(妥当性を確かめる)

表1 「書く活動にはたらく思考スキル」

4 書く活動に関する授業分析結果と考察

各教科の学習において、まず、児童の書く活動が、一単位時間あたり、どの程度、設定されているのかを計測し、他の言語活動(話す活動・聞く活動・読む活動)との比較を行った。

(1) 書く活動と他の言語活動との比較

平均的な言語活動量

聞く活動>読む活動>書く活動>話す活動

今回、分析した授業の多くは、情報収集のための聞く活動と読む活動(INPUT)が多く見られた。したがって、書く活動の時間が、聞く活動や読む活動に比べ、少ないことは当然である。しかし、次のような指導者の意識も必要であるととらえている。

- ・児童が書く時間の保障
- ・個別に思考させ、その思考の結果をノートなどに書かせる活動の位置付け
- ・指導者の発問・指示する時間の短縮

4 思考と表現を一体化させる指導方法の検討

思考と表現の一体化を図るためには、各教科の学習指導において、次の3点が必要であるととらえた。

(1) 児童の書く基礎技能の育成

- ① 筆速(書くスピード)を上げる
- ② 聴写(メモの技能)
- ③ 筆答
- ④ 書き抜き・サイドライン
- ⑤ 図表・図式化

(2) 指導過程に即した書く活動の設定

- ① 各教科、思考を伴う問題(課題)解決の学習過程を踏まえる。
- ② 各学習過程において、どのような思考活動が伴うかを踏まえる。
- ③ 「思考スキル」を取り入れた書く活動の設定

(3) 思考したことを書くための指導の手だて

- ① キーワードを使った書き方指導
- ② 話型・文型を使用した指導
- ③ 学習の手引き(書き方)の作成

IV 考察

各教科における書く活動の指導を行うとき、指導者は、何を書けばよいのか、条件の中から情報や言葉を選択させ、どのように書くのか、目的に沿って構成するような指導を行う。したがって、「考えながら書く」「書きながら考える」といった言葉による思考を、児童は書く過程においても行っていると考えることができる。この書くことにかかわる児童の思考を具体的にとらえ、有効にはたらくように指導することが各教科の学習における書く活動の充実につながるものである。

思考と表現の一体化を図るためには、以下の二点を各教科の学習活動に位置付けることが必要となる。

- 思考場面において、書く活動を設定することにより、思考力を高める
- 書く場面において、思考(言語による情報処理)を促すことにより、表現力を高める